

マラルメの「エロディアード」について

村 島 実 恵 子

多くの詩人の作品は詩人の人間的、精神的深さが充分に描きつくされていない時、年月と共に人々の脳裏から忘れ去られて行く。19世紀の終り、パンセの異常な探求者の一人として、人間と宇宙の間に新しい境地を求め続けようとしたマラルメの態度に新しい生き方を見ることが出来る。

孤独な冒険者であったマラルメは、ヴィクトール・ユーゴーやボードレールの詩に倣うよりは、むしろ、贖罪者としての希望なき不安な日々の中で、詩作に没頭することを好んだ。模倣の才能を十分に備えていたマラルメにとっては、その方がより容易な事であったに違いない、1861年から1864年にかけてのマラルメの詩は殆んど「悪の華」の模倣である。1866年、青年詩人の出版者として業界に出たルメートル書店が発行した「Parnasse Contemporain」にはマラルメの詩10篇が収められている。⁽¹⁾

当時パルナシアンになるには先ず正確なる韻が踏め、感傷や平俗に反対を表明すれば充分であった。これら青年詩人達は悲常に慇懃鄭重で服装もきちんとして居り、役所の吏員が多かった。パルナシアンの中にはルコント・ド・リールから出た*décoratenn*の流れと、バンヴィルから出た*faintaisite*の流れと、ボードレールから出た *intimiste* の流れがある。

パルナシアンから出発したヴェルレーヌは高踏派の芸術を否定し、マラルメはそれを捻ぢ曲げ、置き換え、変化させ、純粹詩の征服へと進んで行く、即ち「語にイニシアティヴを与えることである」

マラルメの純粹詩に於いては丁度純粹愛の神秘論に於いて神にイニシアティヴが委ねられるように、語にイニシアティヴが譲られている。純粹愛の根源に個人があるように、詩の根源には或る図式、感動の調子、許容し

得る空隙がある。その図式の上にそれを存在へと推し進める語を選ぶのである。言葉に対する恐怖、語に対する尊敬は彼にとっては一つの意義を有し、丁度神秘家にとっての神に対する恐怖や尊敬と同じである。又マラルメには常套語に対する病的なまでの嫌悪もある。彼は現実、習慣から他人からナルシスのように身を引く処女^{おとめ}「エロディアード」の中で詩を象徴している。マラルメにとって、語は結合の故に尊いのではなく、秘密の類似暗示的な動き、特殊な言語への不適合と純粹語への可能の故に尊かったのであろう。

12.3才の頃のマラルメは「ベランジュ⁽²⁾になるか、司祭になりたい」と言ったと伝えられているが、これは文人か、それとも僧侶を意味していた。パリ東南方100キロの田舎町サンスの中学に入った頃から、マラルメはフランスの詩人達の文体を研究し始める。1860年マラルメが18才の頃からボードレールの影響が少しづつ表われ始めて来た。これは1864年頃まで続いて行く。

この頃の詩には「死者が語る」と云う種類のものがみられる。ユーゴー、ゴティエ、ボードレール、リラダン等の詩や散文が見せる死者との交流やその神秘的な一面をマラルメが受けついだのもこの頃だと云われている。

青年詩人マラルメは高校の教師にデ・ゼッサールと云う才人を持っていた。詩人肌であると共に、後にクレルモンの大学教授になった。又医者として詩人として活躍するアンリ・カザリスヌ、エジプト学者として有名になったユーゼヌ・ルフェブールの三人はマラルメの若き日の最良の友であり且つ良き助言者でもあった。

次いで若いマラルメを魅了したのはエドガー・アラン・ポーである。多くの詩を手帳に写しとったり、翻訳を試みたりしたのはボードレールの影響よりややおくれた時期ではあるが、「エドガー・ポーの墓」と「シャルル・ボードレールの墓」等マラルメを代表するソネットによってもその影響をうかがい知る事が出来る。

同時にル・コント・ド・リル、テオドール・ド・ヴァンビル、ヴィリエ

・ド・リラダンの名も逸する事は出来ない。これらの人々の影響はマラルメの作品解釈に重要な意味を持っている。即ち憂鬱、空想性、審美主義神秘性等である。

ここに若き詩人マラルメの心をとりにする一人の女性が登場して来る。同じサンスの町に住んでいたドイツ生れの7才年長のクリスティナ・マリア・ジェラールである。美しいと云うよりは「純金のかたまり」のようだと言っている。二人は1862年11月手をたずさえてロンドンに渡り、濃霧でじめじめした大都会での貧乏生活を始める。しかしマラルメが未成年の為、家族の反対に会って結婚は許されず、マリア・ジェラールは一時パリに帰り、友人カザリスのとりなしで再びロンドンに呼び戻され1863年8月10日二人は結婚する。マラルメ21才、マリア28才の時である。

「ポーを研究」する為と行った英国で、マラルメは英語教師の資格証明書を得た外は、詩作に多くの時間を割いている。帰国したマラルメはツールノンの国立中学校の英語教師になる。ツールノンでの生活、これは「単調で慎ましやかで平穩」だとマラルメが想像していた教師生活の裏面に潜む作家としての苦悩を象徴しているようである。詩作と云う松明をかかげて夢に耽る詩人の姿がこの時代から見え始める。夢と美と芸術、これらのイマージュ (image) がマラルメをとりにしたのもこの頃である。この暗闇の夢想の中、1864年～1867年にかけてエロディアド (Hérodiade) に関する詩句の断片が作られる。そこには詩の理想の追求とその理想に追われる詩人の苦しみを感じられるのである。この時代は詩人の23才から26才にかけてであり、ツールノン滞在の後期に当り、ブザンソンでの学校生活にも当たっている。「現代高踏詩集」第一集に収められた十篇の詩はこのツールノン時代にその輪郭を見せたのである。

このツールノン時代の詩作が目標としていたところのものは何であるかは「陽春」「海の微風」等にみられるように詩の理想と苦しみである。マラルメは1866年10月にブザンソンの中学校の英語教師として、その翌年10月には更に地中海に近い南仏の町アヴィニヨンの中学校の教師として移り

住んでいる。

マラルメは深層心理の重要性を呈示している。これはその30年後フロイドによっても明らかにされた所のものである。1864年24才の頃、ボードレールの強い影響から解放されようとして独自の勉強を始める。彼が一枚の白い紙を前にして詩を書き始めようとする時、`無力感`を強く意識する、これが友人に手紙を書く時には苦もなく思想や言葉が生れて来る。これは詩人が如何にとぎすまされた言葉を詩の中で求めようかとしている態度である。マラルメ自身はこの無意識の理由を明し得ず、フロイドがずっと後に`コンプレックス`と呼ぶこの抑圧した状態を追い払うのに適している魔術的な呪いの言葉でそれを表現しようと試みたのであろう。しかもこの病気の`二元性`を舞台にのせようとするのである。即ち登場人物に二重人格の役目を持たせようとしている。はっきりと分れた二人の性格を一人の人間で再現しようと試みている。1864年10月カザリスに宛てた手紙の中でマラルメはエロディアードを又書き始めると言っている。

シャルル・モーロンはエロディアードについて、「この詩は素晴らしい言葉使いにも拘らず、私には奇妙で無器用な詩の一つに思われる。だから読者が詩人の無意識の深さに一致していると云う事が分ればこの詩も理解されるであろう、これをはっきりと表す為に乳母を普通の生活と誘惑を漠然と象徴させているように思われる。勿論それは直接的ではないが、フロイドの論理に於ける様に少年期の喚起であろう」と述べている。

エロディアードの人格、人間性は舞台の上ではいつも同じ状態ではない。王女エロディアードは無意識に時には年老いた乳母に木で鼻をくくったような言い方をする、又時には催眠状態で彼女は鏡の中に自分を映している姿に語りかけたりする。人間と云うものは、瞬間、刹那的に生きようとする感覚と「内なる美」への永遠の幻影との繰り返しである交錯を持っていると云う事がエロディアードの言葉を通してうかがい知る事が出来る。青春時代のエロディアードと人生のかげりの中にある乳母との人生絶望と肯定が一方では未来に対する不安と恐れとためらいから人生否定まで

も叫ばせる若い純なかたくなさを表している。

神への讚美の中に自己を滅却し去ろうとする禁欲的な態度を美しい処女エロディアードでマラルメは謳い上げようとしている。

一方長い人生の平穏な波や荒波を通して来た乳母には現実の人生のありのままの姿をそれなりに理解しており、王女エロディアードの言葉に真実性に乏しい危なっかしさを感じている。時には、なだめ、すかし、脅迫めいた言葉を使ってエロディアードをためすのである。善と悪、神と悪魔の対立、時には神が人間に語りかける呼びかけ、悪魔が人間に語りかける誘いのように、又生と死との苦しい相剋^{こく}とも感じられるのである。

マラルメは「若い娘エロディアードの漠然とした精神状態がふだんの私である」とずっと後、1888年8月20日の手紙でロワイヤから彼の妻と娘に宛てた手紙の中で言っている。

エロディアードを書き始めて1866年にブザンソンの英語教師としてツールノンから移っている。又翌1867年には南仏アヴィニョンの中学へと移っている。この頃のマラルメはかってない精神危機に見舞われている。カザリスに宛てた手紙のなかで「私は恐ろしい一年間をすごした、私の考えが自らを考えつくした」と云っているように、1866年から翌年の春にかけての期間は耐え難いものであり、その後3年間はその危機から立ち直れなかったようである。肉体的にも精神的にも完全な衰弱を経験し、狂気と自殺の一步手前まで追い込まれたようである。この間に進行しつつあった詩作としては「エロディアード」の「舞台」があり、散文としては呪文のような「イジテール」がある。その彼の詩に転機を与えたのがエロディアードであったのかも知れない。「エロディアードの婚礼」と云う主題は1864年からマラルメの一生涯に互って支配し続けたものであるが遂に完成をみなかったものである。

未完成の断片として残されたのが「序曲」, 「舞台」, 「聖ヨハネの頌歌」である。⁽³⁾ エロディアードの詩全体がどの様な構想の下に完成して行くのだったかは明らかではないが、三つの断章の外に多くの断片が発見さ

れ公表されたのは、極く最近1959年の事である。独立した作品とも見えるこの三篇も、沈鬱で奇妙な精神状態に支えられていると言える。「序曲」と「聖ヨハネの頌歌」がいつ頃出来上がったものであるかは、はっきりしていない。只「舞台」文がああ精神状態の危機の最中1867年に一応完成されたとみられている。

結婚を拒否し、若さを他人に誇ろうとしない清純で頑固な処女エロディアードの姿は象徴的でさえある。青春は人生の初期で消え去り、苦悩に導かれて高度の精神状態に到達して行く、これはマラルメの詩人としての姿であったのかも知ない。

エロディアードと乳母の場面の134アレクサンドリアンは詩人の実在を良く表わしている。最初バルナス・コンタンポランに発表され次いで詩集にも表われる。⁽⁴⁾ドマン出版社は他の二篇に入れて出版準備にとりかかっていた時、1898年、当時パリ郊外のヴァンヴァンに居を定めていたマラルメが声門のけいれんで一瞬の中に世を去った為、これは実現しなかった。その為これ等の詩篇は詩人の死後幾久しくして世に出たのである。

「序曲」は96のアレクサンドリアンからなる乳母の独白であり、1926年11月N. R. Fに出ている。又「ヨハネの頌歌」は4行詩の7節で1913年、N. R. Fの詩集で発表されている。他の一篇は「エロディアードの結婚式」と題されて1959年ガリマール出版社からダビの序言付きで発表されている。⁽⁵⁾又同じガリマールから1966年2月サルトルの序言つきで詩集が出ている。⁽⁶⁾

ここ、30年以來マラルメの立場は随分変って来ている。今日では未発表のものまで知られている。又親しい友人に宛てた手紙からもそれらをうかがい知る事が出来る。マラルメは一つの詩を作るのに10回以上書いたと云われる。38年の間に書かれた1,500の詩の中約1,100が発表されている。しかし一つの詩の中に世界を入れようとしたマラルメにとっては、それでも多すぎたのかも知れない。

1868年～1883年の15年間にマラルメは四つの詩しか作っていない。42才

の時エロディアドの作者は又詩作の生活に戻って行く。1892年、1896年、1898年は作品無く、1883、1886、1891、1893、1897年は年に一つのソネを書いている丈である。1884、1890年は年に二つのソネ、1895年は三つのソネ、1885年は四つのソネ、1887年は七つのソネと云った具合である。詩人マラルメによって考察された詩の形態は、ラ・パンセとル・アザールの間の一種の斗いであり、複雑な構成、良く練られた計画、語の適確さが彼のテキストに見られる。故に初期のマラルメ読者は理解するのが困難であったと言っている。その為古典的な学問を身につけた教養ある註釈者達は完全なる辞書のように正しい意味の選択と語の使い方でないと言っている。

マラルメの最近の註釈者の一人、ジャン・ピエール・リシャール⁽⁷⁾は彼の評論の中でマラルメについて次のように云っている。「マラルメの詩の中では、ル・サンスが我々と共に隠れんぼをしているようなものである」

又他の批評家、ジョルジュ・プーレ⁽⁸⁾も次のように云っている。「マラルメの詩は一べつの中に最後までが読みおろせるように構成されている」ジャン・ピエール・リシャールは「例えばニュ *nue* と云う語はニュアージュ *nuage* と云う語と同じようにむき出しの感じを与えるであろう。syntaxe は選ばれた構成によって *le sens* を廻転して使い得る」とも述べている。

この様にマラルメの詩的経験は文学の中でも独自の立場を与えている。マラルメの場合、その詩業の卓越も勿論ではあるが、彼が詩界のソクラテスと呼ばれるその高雅な人格によって及ぼした影響は、その後の世紀末から二十世紀前半にかけての文学を考える上に於ける重要な因子となっている。1880年頃より、パリ、ローマ街のマラルメの部屋には、火曜日毎に詩人の温容を慕って集まって来る青年達の姿がみられ、この集りはマラルメの死によって終止符が打たれた。当時の著名な詩人や文人は殆んどこの火曜会に出席したと云われている。ジードはこの集まりで「思想の実体にふれる思いを体験した」と言っている。

二十世紀の前半、古典的な業績を残したヴァレリー、クローデル、ジードがともに青年期に於ける重要な体験として、マラルメとの邂逅をあげている事は、マラルメの存在の意味を良く表わしているように思われる。

ジャン・ピエール・リシャールはエロディアドの作品について「この作品は同時に直接法にも接続法にも読まれる。そしてその中に美を見なければならぬ。又それと共にマラルメの福音史家のような正確な語り方も理解しなければならない」と述べている。

ジャン・ポール・サルトル⁽⁹⁾はマラルメを評して「この絶望感、マラルメはそれを「無力感」と呼んでいる。何故ならば、彼は全ゆる靈感を拒否する傾向があった。且つ又全ての詩の主題が抽象的概念や詩の形態になるとは思っていなかった。これは形而上学を推し進めることになり、マラルメを或る種の分析的な物質主義と漠然としたスピノザ者となしている」と述べている。

青春の代名詞に用いられているエロディアドは聖書の中に出て来るサロメの母であるエロディアドと同じではない。詩人マラルメはきつと意識的に取り違えたのであろう。詩人マラルメはサロメにエロディアドの名を与えている。イラルメはこの魔術的な名前を好み、エロディアドを書き始める数ヶ月前に作った“Les Fleurs”⁽¹⁰⁾の中でも美しいバラの花にこの名を与えている。

(注)

- (1) Les Fenetres, Ies Fleurs, Ie Sonneur, Vere Novo, Angoisse, Epilogue, l'Azur, Brise Marine, Soupir, Aumône.
- (2) ベランジュは当時有名な詩人兼歌手であった。
- (3) édition de la Pléiade, N.R.F. 1959)
- (4) la première fois en 1871, puis en 1887.
- (5) G. Davies (Gallimard, 1956)
- (6) Préface de Jean-Paul Sartre
- (7) Jean-Pierre Richard, l'Univers imaginaire de Mallarmé, P. 553)
- (8) Georges Poulet (la Distance intérieure, P. 350)
- (9) Poésies. Stéphane Mallarmé. N.R.F.
- (10) Pareille a la chair de la femme, la rose Cruelle, Hérodiade en fleur du jardin clair.